









てせらるゝあよ人のつとて死ふかりづてせらるゝあよの死を  
 あくまびとちのなりしれ別れたのりしなり天地はうら  
 の物とつじ父母あり父母と死うらうらくうらあやうい  
 ぞせらるゝ人ならふうらうらくにせのあらうらうらくはわ  
 の孝義ありとせららあうらうらうはよん民といはくちては物とあ  
 らまじよとよ義禮智信のたよとふか仁やまうらうらうら  
 と百部の源いづらうらうらうらうらうのあかりあうら  
 てもくす化の物いせうらうらうらうらうのいもんわ  
 すてようらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 人のあうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

せすていせうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 くらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 教限りあうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 祿とたくののうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 母とて死れうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 ちのうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 色とてうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 あうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 らうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 らうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら



























一 鐘の音は清く響き渡る如く  
 二 鐘の音は遠くまで響き渡る如く  
 三 鐘の音は心に響き渡る如く  
 四 鐘の音は世に響き渡る如く  
 五 鐘の音は法に響き渡る如く  
 六 鐘の音は徳に響き渡る如く  
 七 鐘の音は道に響き渡る如く  
 八 鐘の音は徳に響き渡る如く  
 九 鐘の音は徳に響き渡る如く  
 十 鐘の音は徳に響き渡る如く

親の善教を承け  
 一 鐘の音は清く響き渡る如く  
 二 鐘の音は遠くまで響き渡る如く  
 三 鐘の音は心に響き渡る如く  
 四 鐘の音は世に響き渡る如く  
 五 鐘の音は法に響き渡る如く  
 六 鐘の音は徳に響き渡る如く  
 七 鐘の音は道に響き渡る如く  
 八 鐘の音は徳に響き渡る如く  
 九 鐘の音は徳に響き渡る如く  
 十 鐘の音は徳に響き渡る如く





























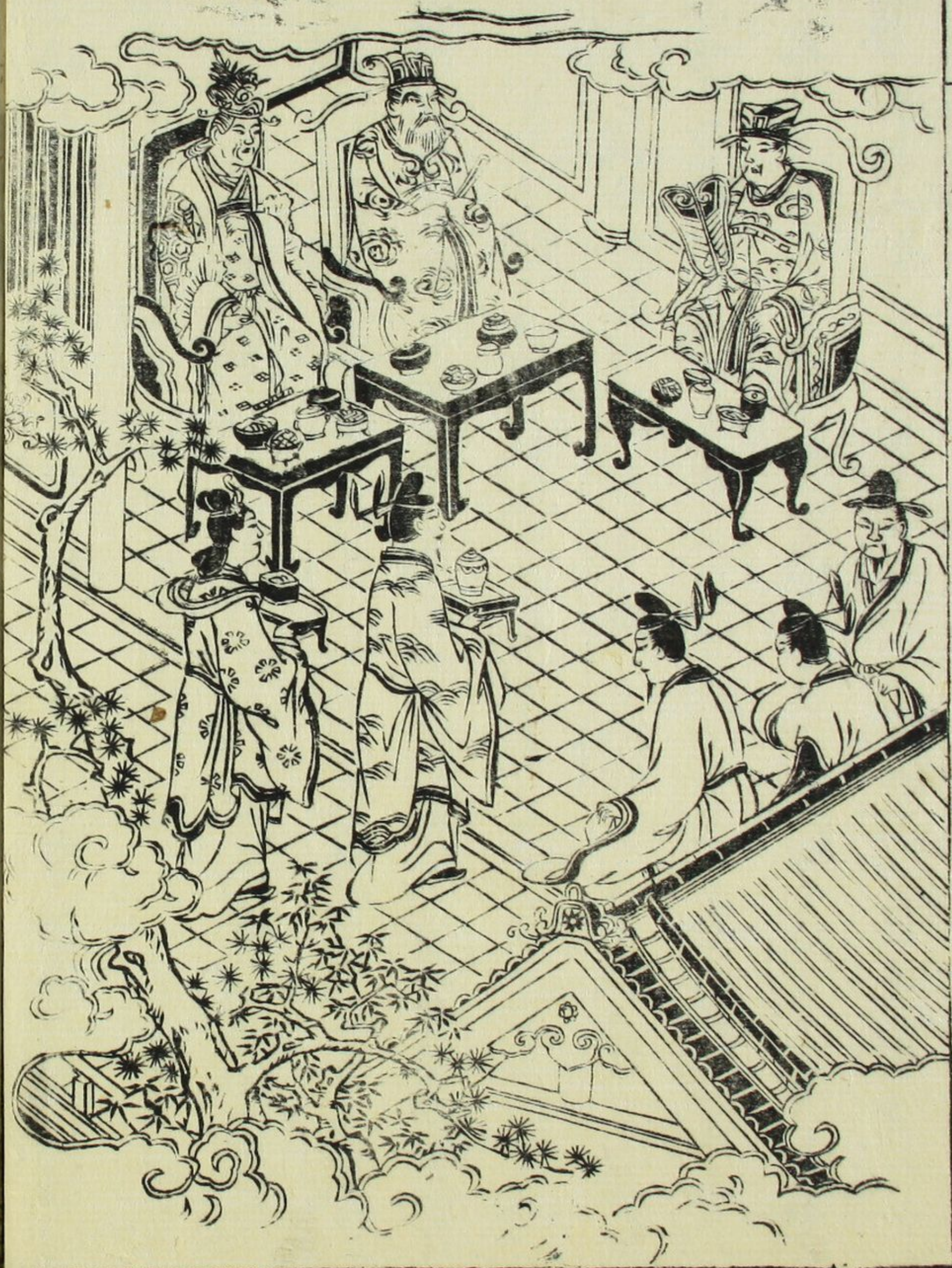












女は嫁してより母をまぶらるる娘なりともは孝行の思ふ  
 その事他よりばくが身よそひくゆりせあふらこもわらけ  
 めごとあがめなりらくしをそくひかきとふすおのらあわな  
 とくふまほしする時のいま一のひにまよく後い習は  
 らくはくもあぶらまよき音してまめてもくわりのこれ  
 嫁してより後のなかりら母のせねあともうてもはまのりよ  
 ちんちんかうらぶくしとくしうらねんてふもわらわらりか  
 かりとくひくあふらまよき音してまめてもくわりのこれ  
 なるまよき音とあふらまよき音してまめてもくわりのこれ  
 とくかりら古争あといらあり







春ののすこわりほよ刺さるはらり先くおんはくはりふ武  
 ねとなりぬ又案の孫の返を泰山よわきくたをともつて  
 てわひらういしまづらりたはびもころりわせばまうあすに  
 とふかて妻もあつてまらるを何の丞相を御し人あつて  
 つとあていづくさりわらぶ我娘あわりもあつてい  
 つり明返にかつらつてまういすもあつてつらつたを  
 せびくつていづつてまう御しつとあつてあつてあつて  
 若の妻もあつてつらつたを御しつとあつてあつてあつて  
 らのいづつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 まういづつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

毒のれとつとつらつて明返にまう御しつとあつてあつて  
 何よつとつらつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 富まるといふはあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 けいこつとつらつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 常よりいづつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 ていこつとつらつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 ののつとつらつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 ちつとつらつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 かりつとつらつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 うつとつらつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて











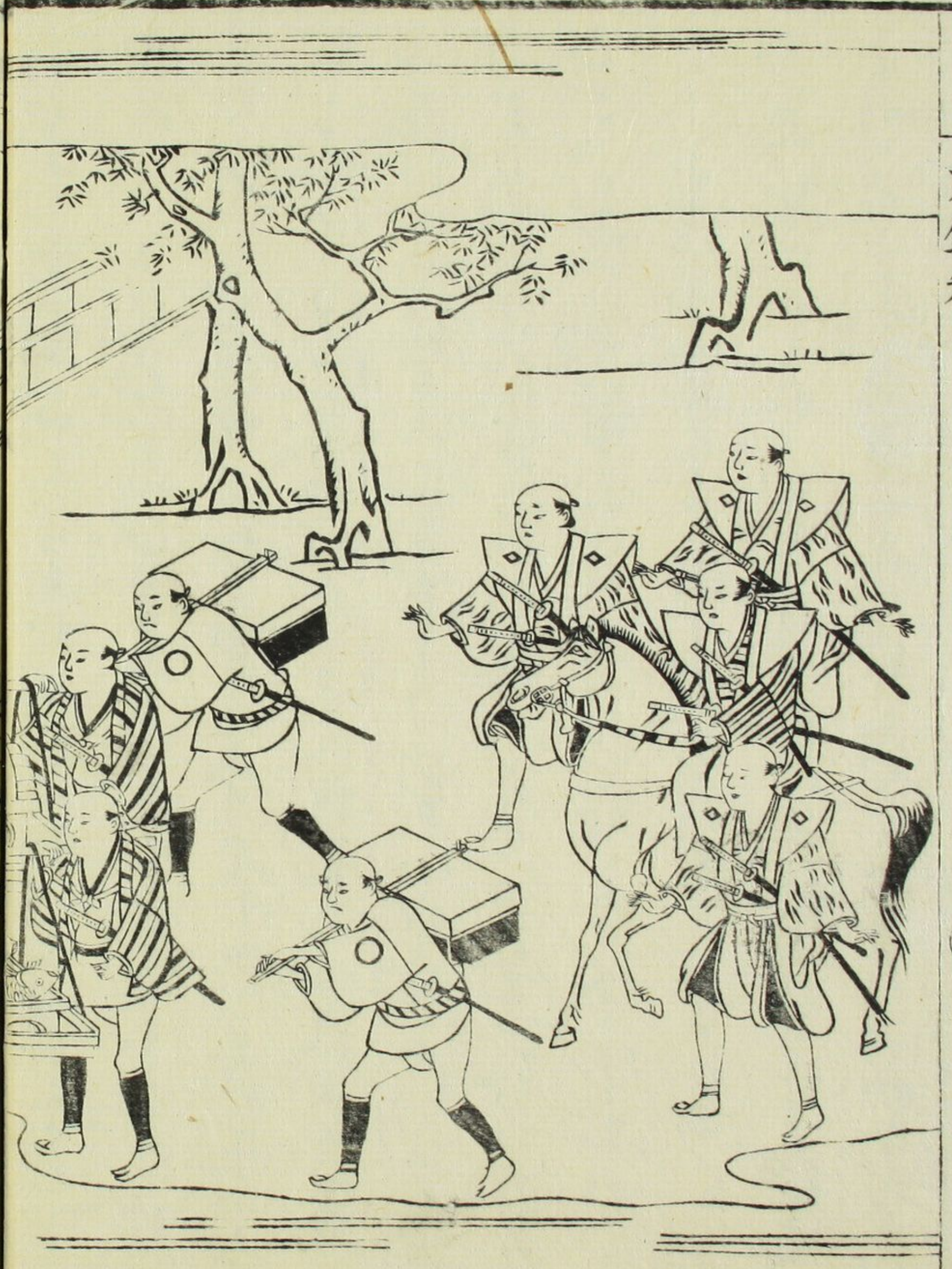
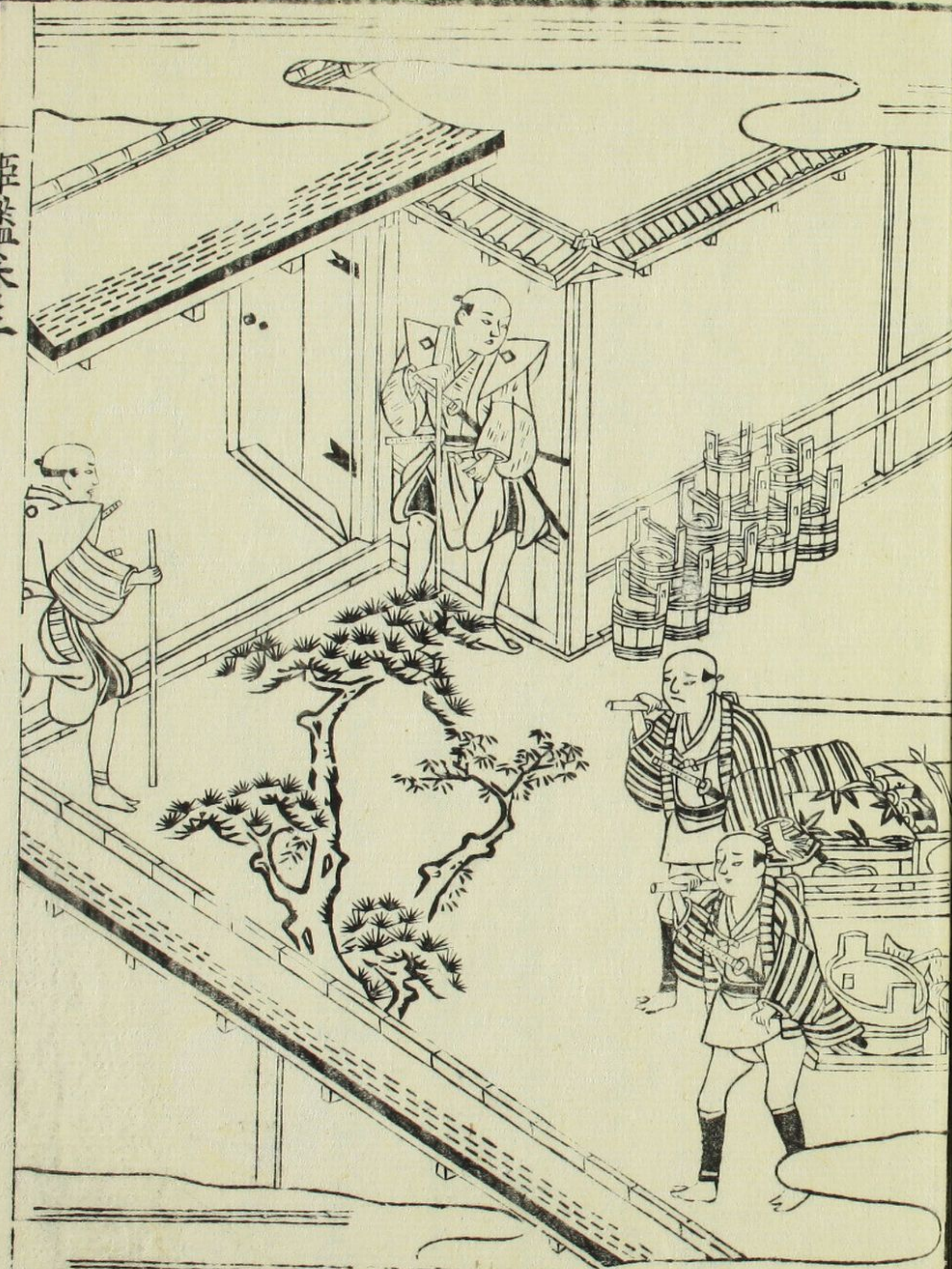
どどとてはく陽あり輝きして澄んかむさむのひに影もあつ  
 まり陽のこころをさかすひのいもつこもさかす影のこころを  
 ぞん陰れ志のあつらむよりの地とむすひのこころをさかす  
 じよつりこの氣地よほりりてむすびた地とむすひの  
 うもくその形とむすひのむすびもさかす影のこころを  
 よもひさのほりて地よほりりてむすびのこころをさかす  
 女やうあつとむすひの地とむすひの地とむすひの地とむすひの地と  
 あくも物なりとむすひのこころをさかす影のこころを  
 たぐむの福ありとむすひのこころをさかす影のこころを  
 むかすこと天化神明よそむすひのこころをさかす影のこころを

ういぬとたりれ祀よほりりてむすびのこころをさかす影のこころを  
 妻由交りてむすひのこころをさかす影のこころを  
 廣うりりれ婚れとむすひのこころをさかす影のこころを  
 乃始とむすひのこころをさかす影のこころを  
 そのひなありとむすひのこころをさかす影のこころを  
 むすびのこころをさかす影のこころを  
 乃始とむすひのこころをさかす影のこころを  
 とむすひのこころをさかす影のこころを  
 ういぬとたりれ祀よほりりてむすびのこころをさかす影のこころを  
 妻由交りてむすひのこころをさかす影のこころを  
 廣うりりれ婚れとむすひのこころをさかす影のこころを  
 乃始とむすひのこころをさかす影のこころを  
 そのひなありとむすひのこころをさかす影のこころを  
 むすびのこころをさかす影のこころを  
 乃始とむすひのこころをさかす影のこころを  
 とむすひのこころをさかす影のこころを



























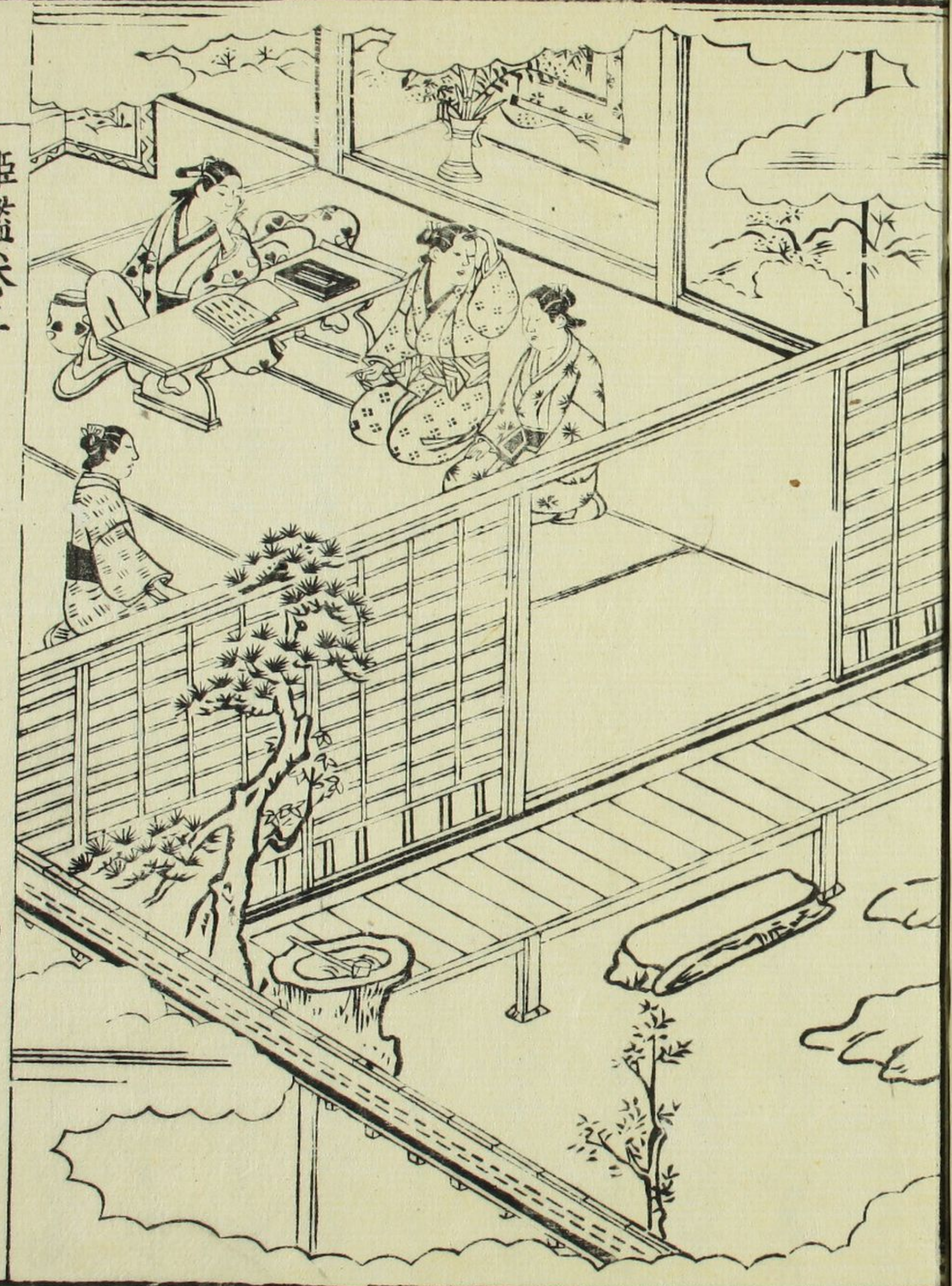








わつちより又衣振のゆきもいふまゝにゆくはなれぬまゝにゆくは  
 とまらぬけしむらひのうらなれとほのうらなれそのねとほのね  
 のおとらうとこれ事なづかひのねのねのねのねのねのねのねのね  
 よあひのねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのね  
 又周易のうらなれとほのねのねのねのねのねのねのねのねのねのね  
 ふるまたり女はゆきもいふまゝにゆくはなれぬまゝにゆくは  
 とまらぬけしむらひのうらなれとほのうらなれそのねとほのね  
 たは酒食のゆきとほのねのねのねのねのねのねのねのねのねのね  
 礼のねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのね  
 ついよりのねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのね













鄭氏家範よはしとてはもへくもへりれにあられよあふり  
 あしざれち男かさうづらとゆへえびとあり是の他姓の男かど  
 せりあれの時よりかよはつらぶとらあなわらたどはれぬ  
 美の季康子があからざら公父務佐がはまらりまの康よ  
 まつ時八國のすびとてあひもれどもたがひよまをいぬ  
 あじ家筋れ糸れよま康ももあひつらとてはもあふり  
 ちふとて後宮あもはつらわらりしとてはもあふり  
 乃けられの大給さり公父成の婿とらつらとてはもあふり  
 やめあふ是の級業のあもて一かはもあふり  
 礼記よはしとてはもあふり

続史よはしとてはもあふり  
 ありと男のあひ中よはしとてはもあふり  
 なま時八神とてはもあふり  
 おもあふり  
 ちふとてはもあふり  
 かはれぬ  
 なりたあふり  
 ちふとてはもあふり  
 ちふとてはもあふり  
 ちふとてはもあふり















































